



六ヶ所村の魅力を発掘・発見・発信！

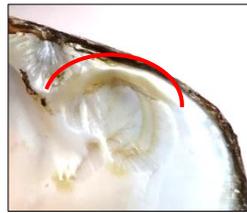
二又魅力発見ツアー関連「カワシンジュガイ編」

カワシンジュガイは北海道と山口県までの本州、コガタカワシンジュガイは北海道と青森県、岩手県、長野県の3県で生息が確認されています。これらは、2022年(令和4年)4月1日、特定第二種国内希少野生動植物種に指定され、捕獲及び譲渡が禁止されました。

- 1 カワシンジュガイ:(川真珠貝)ヨーロッパでこの貝から真珠を採集していてこの名がつき、氷河時代の北方系の遺存種で、日本の分布が南限にあたります。
- 2 コガタカワシンジュガイ:六ヶ所村で生息していて、カワシンジュガイに比べると小形で、通常は殻長が10cmを超えず、この貝は、カワシンジュガイと違ってコロニーをつくらず、カワシンジュガイより数が少ないです。郷土館の2月と3月の調査では、採取した42中、コガタカワシンジュガイは7個(約16.7%)確認されています。
- 3 二つの貝の見分け方は:この二つの貝の区別は外形では難しく、貝殻内の前閉殻筋痕の形で見分けます。カワシンジュガイの前閉殻筋痕の形は丸い耳形状で、コガタカワシンジュガイは折れ曲がり尖った耳形状となっています。 ※写真:郷土館職員撮影



カワシンジュガイ



カワシンジュガイ



コガタカワシンジュガイ

- 4 利用方法の歴史:カワシンジュガイの内側が真珠層で、昔、ヨーロッパでボタンを作ったり、装飾品として使ったりしていました。日本では、カワシンジュガイの殻が縄文時代の遺跡から発掘されていて、縄文の人々が食用や装飾用に使っていたと考えられています。また、北海道のアイヌの人々は、カワシンジュガイの貝殻を「ピパ」と呼び、「穂摘み具」として昔から利用していました。
- 5 魚に寄生する:カワシンジュガイ類はオスとメスがあり、卵からはグロキディウム幼生が生まれ、成熟すると川の水に放出され、宿主となるサケ科魚類(ヤマメ)のエラに触れると寄生する。稚貝になると宿主のエラから離れて川底で生活を始め、数年から数十年かけて大人の貝に成長していきます。



穂摘み具「ピパ」

カワシンジュガイ類は、生態系においてとても重要な役割(水質浄化)を果たしており、適切な保全活動(生息域の調査や保護区の設定、捕獲及び譲渡の禁止を知らせる案内板の設置など)が必要となってきます。今回、二又自治会を通して、この貴重な貝について周知できたことは、保全活動の第一歩となりました。